

成鶏めす羽数と産卵量 昭和38年1月-3月

岡山統計調査事務所調査

成鶏めす（ふ化後6ヵ月以上経過したにわりのめすをいう）飼養羽数および産卵量の調査結果が農林省統計調査部から発表になったので本県の部分を抜粋してお知らせします。

成鶏めすの飼養羽数は全国的に見て北海道、静岡、愛知、大阪、兵庫に次いで大きく、これを産卵量から見ると愛知、静岡に次いで第3位を占める主産地といえます。

本県の1月から3月までの飼養羽数の推移を見ると前年同月は36年春、秋ともに多かった県内餌付けひなが成鶏化したため、大巾な増加を示していましたが、本年は約6%下回る飼養羽数となっています。

産卵量については1月から3月までの累計で154,200千個で前年比では91.3%と約9%の減少を見せており、産卵率も1月は前年同月比96.2%、2月は96.4%と前年を下回り、3月にいたって前年対比98.2%と前年並みの水準に近づいています。

これは1月および2月の寒波、降雪などの影響で産卵率が低下したものと考えられます。

月別	成鶏めす羽数			産卵率(%)			産卵量		
	37年	38年	前年対比	37年	38年	前年対比	37年	38年	前年対比
	千羽	千羽	%			%	千個	千個	%
1月	3,045	2,842	93.3	53.3	53.2	96.2	52,205	46,900	89.8
2月	2,971	2,797	94.1	63.4	61.1	96.4	52,746	47,900	90.8
3月	2,932	2,775	94.6	70.4	69.1	98.2	63,995	59,400	92.8

(注) 昭和38年の産卵量は10万個単位で出した数である。

赤かび病による被害麦の飼料としての取り扱いについて

本年産の麦は赤かび病に侵され、収穫した麦の処理に頭を痛めていることと思われま。

この麦を家畜に給与した場合、家畜に与える影響はどうか、昨年の発生により畜産局長からの通ちょうを再録し皆様の参考にしたいと思ひます。

(9月11日37畜B第4187号畜産局長より各都道府県知事あて)

今年度産の麦類は、登熟および収穫時期における不良気象に原因し、赤かびの発生したものが地域的

にかなり大量にみうけられるが、麦に発生する赤かびには毒性を呈するものが多く、農家がこれを飼料に用いる場合には慎重な注意が必要である。

長雨による被害麦が人畜に与える影響について(回答)

(8月24日37畜B第3,444号畜産局長より香川県知事あて)

わが国における麦の登熟および収穫時期の気象条件はややもすると、赤かび発生誘因をもたらすことが多く、今年の6月から7月における長雨の貴県を中心とする地域に大量の赤かびによる被害麦が発生したようであるが、これら麦の用途には特に慎重な注意が必要であるので、7月23日付のご照来のけんについて次のように回答するからよろしくご指導方をお願いする。

記

1、麦の赤かびの毒性の程度

赤かびによる被害麦は大麦のほか、えん麦、小麦等にも発生し何れも人畜に対して有害である。

しかし赤かび病による被害麦の人畜に対する毒性の程度については未だその毒性分の本態が明らかでなく、かつ赤かびの種類によって大差があるといわれているが、その毒性の決定は困難であり、これを明らかにした文献も知られていない。

この有毒成分に対する家畜、家きんの感受性は馬、豚、犬は非常に高く敏感であるが牛、羊および鶏はこれに反し比較的鈍く、諸外国においても被害麦の処理法として10%以内を普通麦に混合し牛、鶏等に給与している模様である。この有毒成分は、また煮沸によっても減毒はしないし、長期間(半年ないし3ヵ年)毒性分が維持されるものといわれている。

2、中毒症状

消化器に著名なカタル症状がみられた家畜は食欲不振となり、下痢を發して衰弱する。なお食欲不振は有毒成分が脳に作用するためらしく豚、馬にあ

岡山畜産便り 1963.05・06

っては家畜の好む飼料を与えても菜食意欲を示さず餓死に陥ることさえみられるといわれている。

モルモットにおける実験的中毒例では肺、副腎、大腸の出血、早期流産を示したのである。

3、発生したときの処置

被害麦の供与を中止すれば、軽度の場合は自然治癒する。重傷の場合は程度により異なるが栄養剤および水分の補給等のほか対症療法により毒成分の自然排出をまつほかはない。このため価値の低い家畜では早期処分することが得策である。

4、乳酸醗酵措置による毒性分の変化

乳酸醗酵によっても有毒成分は減毒しない。

5、利用法

甚だしくかびの発生したものは廃棄することが必要であるが、穀粒を粉末にし、紫外線を照射するとその発生の程度に応じ呈色を異にするので判定するものである。

被害麦を数日日光にさらせば穀臭がよくなり、また食塩水で洗って乾燥して与える。

この場合も良質の麦と混合して与えればよい。混合の程度は10%以下であれば牛、鶏に対しては殆んど害がないといわれている。

6、文献

宮本三七郎
大川徳太郎

共著 家畜有毒植物学